

おお大勝利

平成 25 年度山東サッカー部報第 23 号 (12 月 20 日)

サッカー部保護者の皆様、OBの皆様、日頃より本校サッカー部の活動にご理解とご協力を賜りまして、感謝申し上げます。

部報作成、遅くなりすみませんでした。公務・私事多忙により、前号から1カ月相手の23号となりました。

一年生大会 9人で大健闘

11月23日(土)24日(日)地区内各所で村山地区一年生大会が行われました。**山東の一年生は9名しかいない**ため、厳しい戦いが予想されますが、実は内心「ふふふ」とほくそ笑んでいました。なぜって、9名で試合に臨んで「相手に攻め込まれる」「失点する」なんてのは当たり前の話であって、心配するに当たらない。もし攻め込んで惜しいチャンスを作るだけで、「よし、良い攻めだ」「よく攻め込んだ」と評価できる。いや、ボールを長く保持するだけで、「くくく」と笑みがこぼれる。だって、**11人相手に9人でボールを保持するって痛快じゃないですか。相手の攻撃を凌ぎ抑える、得点してしまう、なんてなったらもう最高です**。4年前の一年生大会(タダの代)では、7名で試合に臨み¹、山南相手に先制するという快挙を成し遂げたことがある(結局1対4で負け)。あのときの選手の頑張りはいうれしかったな~。逆に、去年の明新館戦はやりにくかった。こちらが11人であちらが9人。実際失点もして、勝つには勝ったが、内心複雑でした。さて、今年、7名ほどではないにしても、「**失うものは何もない**」**楽な気持ちで臨めるめったにない試合**。選手がどこまで頑張ってくれるか、楽しみに試合を迎えました。

場所は山商グラウンド。前日まで悪天候だったため、ピッチコンディションは最高とは呼べないまでも、十分ボールが転がる。**ムンタリをワントップに、トップ下カツミ、ボランチがタイチとサッチモ、右SBタロー、CBタツルとシャモジ、左SBピラフ、そしてGKはサフロー**。タローもいてサブローもいる今年の山東「サイン」。せっかくだから、そろそろ(次男坊の)タツルのあだ名はジローか。作戦は、当然ながら、**リトリート・カウンター作戦**。リトリートは退却を意味する英語で、前線からボールを追わず、みんな自陣ゴール方向に下がって守備をすること。人数が少ないだけに、選手間の距離(ギャップ)が空きすぎないように密集すること(ブロックを作ること)を意識しながら、相手の攻撃を自陣で待ち構える作戦。どうしても、前線からボールを追うと前衛と後衛の距離が空いてしまい、ただでさえ人数が少ないのに、「すかすか」になってしまいがち²。前線からア

¹ サッカーは、7名いれば一応試合は成立。当時、インフルエンザが大流行しており、11名いた一年生も怪我、インフルエンザで結局7名となってしまったので。主将のタダも体調不良を隠して試合に出場し、前線に超孤立したワントップでしたが1点決めてくれました。その後、インフルエンザでしばらく学校休む、というオマケ付きでしたが・・・。

² 兵法の極意と同じですが、集団の力が出るような配置もしくは動きが「戦い」においてとても重要です。11対11の戦いは人数の上では五分五分ですが、相手の連携を寸断させ、11対1を11回繰り返す戦いができれば、必勝です。

プローチに行く際には、後方もラインアップを行い、「間延び」しないよう努める必要がある（事情があってラインアップできない場合は、前線からボールを追いかけることを自重する必要があります）。常々ボールに寄せる（みずから奪いに行く）ことを指示しているだけに、この日ばかりはいつもと異なり、「**行くんじゃなくて迎えるんだぞ**」と念押しして選手をピッチに送り出しました。ただこの作戦、**後ろに人数をかけるとしても、相手の攻撃を自陣近くに呼び込むだけに最後の粘りが利かなければ作戦が仇となる。**

どうなることやら、戦況を見つめると、意外に良い試合をしている。山南は、選手間の距離を自ら縮めて狭い局面で数的優位を作りながら、ショートパスを回し続ける**バルサミコ戦法**でくるが、2年生チームと違い、トラップで方向を変えて進行方向を限定してくる山東選手をいなしたり、意表のつくパスで山東の守備の予想の裏を突いたり、ということが少ないため、意外に守れている。特に、**山南が自ら狭い局面に多く的人数が入り局地戦をしかけてくるので、逆サイドがスカスカな山東としては、数的不利にならない。**「もっと幅を使った攻撃をすれば、（人数が足りないためスライドが間に合わず）こちらは苦しいんだけどな〜」³などと思いながら、山東の選手の健闘ぶりに目を細める。山南のシュートもゴールマウスを外れることが多い。**危険なシュートシーンが訪れるたびに、齋藤 GK コーチがベンチで「外れろ」とか「外しちまえ」と念じる**効果か、山南のシュートがゴールマウスを外れるか、サブローの正面に飛ぶことが多い。そうこうして粘っているうちに、後半、センターラインから少し相手陣内右側に入ったあたりでFKを得る。蹴るのはカツミ。この時ばかりは上背があり可能性のある選手が前方へ。蹴られたボールはファーサイドへ飛び、裏側から相手のマークを外した(?) **タイチ**がフリーでドンピシャヘッド！ 山東先制！！ なんとなんとやってくれました。その後は、山南のなりふり構わない攻撃（強引なドリブル突破）に冷や冷やさせられましたが、**最後までしっかり守って1対0の勝利。**まさに、ニンマリ（しめしめ）の**歴史的一勝**となりました。

さて、二戦目の相手は、初戦10人の山商A(!)⁴を粉砕したモンテユース。山東生のルイも名を連ねている。さすがにモンテには通用しないだろう。志村顧問の指示のまま山商裏手の「伝説のス〇井」で腹を満たしつつ、まな板のコイの心境で試合に臨む。もちろん圧倒的にモンテペース。**やはりモンテは、アウトサイドがSBの1人なのを見越して、アウトサイドで数的優位を作ってくる。そして、中央の選手が一方のアウトサイドに寄せさせといて、逆サイドへ丁寧にサイドチェンジしていく。**オートマチックというかシステムチックというか。山東としてはととてもとても苦しい。ただ、**SBのタローとピラフが本当に頑張っており、タローはクレバーさで、ピラフはスピードで相手と互角にやり合っている。ボランチ+トップ下の3枚および2CBも、アウトサイドで数的不利にならないように、必死でスライドを繰り返している。**山東、モンテユース相手にも良い試合してます！

³ 山南のサッカーを、今年、バルサ（FCバルセロナ）にちなんでバルサミコと呼んでおりますが、バルサのサッカーとの決定的な違いは、バルサはショートパスを回し続けながらも、幅と深さをしっかり取ってくる（幅と深さを確保しようとする）が、山南はそうではないところです。だから、山南の場合、打開できないと、ゴチャゴチャやっただけ、になってしまいがちです。まあ、結果が出なかったとしても方針を貫き続けるからチームカラーやポリシーと呼ばれるものになると思いますし、相手の方針をとにかく言えるほど高尚なサッカーをこちらが全然やっていないので、他のチームがとやかく言うことではないのですが、新庄北高校のI先生なんかも大分気にしているようなので、バルサとバルサミコとの比較をしてみました。

⁴ 山商Bも10人しか登録選手がおらず、総勢20名で2チーム出場させるという何とも奇想天外な策に出た今年の山商。

前半ヒヤッとすることが2、3度ありましたが、そこはGKコーチの送る念により、厳しい所にシュートが飛ばない。**このままスコアレスでハーフタイムを迎えるのかと、それこそほくそ笑んでいると、スコアが動きました。しかも動かしたのは山東！！** 孤立している関係から、なかなかいい所を出せずにいたワントップの**ムンタリ**ですが、ハーフライン付近でクリアボールのバウンド処理を誤った相手DFのミスに付け込み、カウンターとなるドリブルを開始する。相手CBと1対1。ドリブルの角度から、予感はしていました。ムンタリの得意な形だから、チャンスだと。案の定、スピードでぶち抜き、ぶち抜きざまにGKの足下横を抜けるシュートでネットを揺らし、山東先制！ムンタリのプレースタイルを知っている顧問としては「まあ、そんなところだろう」という感じでしたが（決して余裕かましているわけではなく）、知らない人には**衝撃的なキレ**だったかもしれません。そして1対0で後半へ。

後半もちろんモンテペースですが、モンテは時間が経つにつれ、選手がイライラ来出している。下位チームが上位チームを喰い波乱を起こすときの一つのパターンが、粘るうちに、（粘られるわけがないチームに粘られフラストレーションがたまり）上位チームが内部分裂を始める展開。**ニアサイド上のシュートを片手ではじくサフロアのファインプレー**もあり、そうなりかけていましたが、やはりモンテが上手でした。パスとドリブルを織り交ぜ、（アウトサイドを抉ってセンターリングではなく）アウトサイドからゴールに直線的にボールを運ぶ「相手を剥がす攻撃」（まさに penetration 貫通・突破）から、失点。一年生大会3連覇（？）しており、上級生から「負けたら坊主」と厳命されているモンテ選手の喜ぶこと。その後も猛攻にあい、シュートブロックのためスライディングで身を呈したピラフのプレーに与えられたレフェリングはハンド。痛恨のPK献上。GKコーチの「外しちまえ」の念は今度ばかりは効かず、逆転を許す。（最後の手段である）スライディングに初めから頼るのはプレーの優先順位から考えて良くはないですが、**最後の最後まで体を張れない選手もいる中、ピラフのスライディングは彼の魂を感じました。ピラフ、天晴れ！！！！** その後、タツル改めジローがCKのゴチャゴチャからルーズボールに反応しゴールに迫りましたが、GKコーチの「入ってしまえ」の念も効かず惜しくもシュートは外れ、ジ・エンド。結局1対2で惜敗となりました。逃した魚はあまりにも大きい、もったいない、そう感じましたが、そう感じるだけの試合をした選手を褒めるしかない。あと、**2年生の応援も素晴らしかった（合わせて2年生保護者の応援も素晴らしかったです！）**。山東の一体感を遺憾なく発揮した一日となりました。

試合後、もし選手から「9人でこれだけやったのだから、11人いたら勝てたんじゃね？」みたいな発言が出やしないか、今日の選手の頑張りを褒めつつそのような勘違いをしないように選手をもっていく必要があるな～、などと感じながら選手がストレッチしている輪に近づくと、この大会キャプテンを務めた選手から、「11対11だったら逆にボコボコにされたんじゃないか」的な謙虚な発言が自然に出ており、ますます選手を頼もしく感じました。代々、技術はかなり怪しくとも、**選手が自主的にチームを運営できるところに山東の最大のストロングポイント（最善の伝統）があると捉えてきました**が、1年生とはいえ、その伝統をしっかり引き継いでおりました。**ミホ、スミコのマネ2名含む11名の1年生諸君、天晴れ**（日曜日午前の某番組のようになってきました）。

結局、この大会、モンテユースの連覇で終わりました。バリカンに電源を入れるくらいまで迫りましたが、詰めが足りませんでした。皆様、これで今年の試合の日程は終了と

なります。1年間ありがとうございました。

この大会を HP で観た元山東サッカー部部長鈴木正浩先生より、メールを頂戴しましたので、せっかくですから皆様にご紹介いたします。鈴木先生は、前顧問渡邊先生が現役の頃インターハイ・選手権の 2 冠を達成された時の監督、今野がインターハイ行った時の部長でございました（その時の監督は現校長佐竹先生）。鈴木先生、ありがとうございました。

今野先生

今シーズンも公式試合は終わりですね。

最後が 9 人のチームとは・・・時代の流れ、でしょうか。驚きです。

後藤さんの速報で大いに楽しませてもらいました。

お疲れさまでした。

高校サッカー選手権は米沢中央が初出場ですね。

テレビ（鶴岡会場だったので TV 応援にしました）で言っていた

「米沢中央 29 年ぶりの決勝進出」。

29 年前の相手がわが山形東だったんですよ。渡辺、野口・・・の。

1 点を先制されながら追いつき、後半終了 1 分前の決勝点で逆転勝ち！

あかねが丘競技場（当時は立派な）スタンドを埋めた観衆の見守る中で、

「山東創立百周年にして高校サッカー初出場」を決めたのでした。

秋津球技場での 1 回戦の相手は九州学院でした。

米沢中央の相手が福岡だそうで。やはり九州勢と。

早々と 1 点を取られたものの、渡辺の CK から後藤がゴールを決め、同点にしたものの、結局 1-5 の敗戦でした。

渡辺が足を怪我して痛み止めの処置をしての試合、しかも DF のかなめの金が、これまた足の負傷で動きが鈍く・・・オフサイドがとれない、もどかしい思いのゲームとなったのでした。

この年度に、インターハイとの 2 冠制覇だったのですね。

折しも百周年の祝いに花を添えて、喜んでもらったのでした。

あれから 30 年、しかも創立 130 年となる来年度、インターハイ校長と先取点男の監督のコンビのもと、選手たちが躍動する姿を応援したいと思います。

納会終了 三年生受験頑張れ！

12月12日(木) 第32回山東サッカー部納会が恒例の中島商店にて行われました。この企画、**マネージャーが作成した一年間の公式記録集**を片手に、OB会がふるまってくださるすき焼き鍋を囲みながら、一年のまとめをするもので、今年で32回を迎えました。**初回は、現PTA会長にして主将善貴のお父様の丹野さんが3年生の時だったようで、今年4月亡くなられた武田栄四郎前OB会長の肝いりで始められました。**丹野さんは第一回の優秀選手でございます⁵。何と今年、OB会から7名も集まって下さり、選手数が少ない分、会を盛り上げて下さりました。

まず会長から今年一年の悔しさ嬉しさを総括するお話と、3年生に向けた顧問の話のあと、5名の優秀選手賞を発表し表彰した後、乾杯(その5名と授賞理由は下の通り)。さまざまな作り方がすき焼きにはあろうかと思いますが、現役生は思い思いの「鍋」を作っておりました。途中、OBの方々から激励の一言を頂戴し、2年生キャプテンの感謝の言葉があった後は、3年生の決意の言葉。力強い宣言と心配になる宣言と両方ありましたが、**納会で蓄えたすき焼きパワーをぜひ勉強で発揮し、志望の実現に向けて頑張ってください**と思いました。

二次会は、これまた恒例の寿屋にて。おそば屋さんで飲むそば焼酎(焼酎のそば湯割り)は格別で、毎年楽しみにしているのですが、今年も堪能させていただきました。私も、センター指導に向けた英気を頂きました。ありがとうございました。

大沼陸

高速ドリブラー。今年のチームで敵に脅威を与えることができる選手といえ、彼になるだろう。1・2年時は、ボールの置き所が右足偏重なため、ドリブルのコース、トラップでボールを転がす場所とも、よく判断されておらず、ボールロストが多かった。が、2年のオフシーズンくらいから徐々に本格的に頭角を現し、3年では頼りがいのあるアタッカーとなった。ボールを後方から受けた時に、真後ろに敵がいないと観るや、トラップせず前方にそのままボールを転がしスピードに乗ってドリブルを開始するプレーが印象的。Y2AリーグのモンテB戦での得点シーンや、鶴東戦でのドリブルの数々は、脳裏に焼き付いている。

松田航星

中学からサッカーを始めたためテクニックに難があったが、前向きな性格とスマイルでチームの良好な雰囲気づくりに貢献。その性格の良さから、サッカー部外からも、顧問がためにつけた愛称「イギータ」で呼ばれることとなった。Bチームでは精神的支柱として活躍。右SBやSHで出場の際には右足クロスでたびたびチャンスを演出し、「ベギータ(ベッカム+イギータ)」とあだ名が進化したことも。グラウンド・マネージャーとし

⁵ 興味のある方は、山東サッカーOB会HP上に優秀選手一覧がUPされておりますので、ご覧ください。

て、練習メニューを考え、指揮した功績も大きい。人間性の良さを余すことなく発揮したサッカー部生活であったと思われるが、今後は、その良さを残しつつ、我を出し我がままな所のあるイギータにも成長してほしい

薄場圭

善貴とともに、1年から3年間連続で県総体に出場した選手。スピードのある方ではないが、大柄の体躯を活かし相手の動きを読んで体を入れてボールを奪い取るCDFタイプの選手。もともとジュニアユースまでは県を代表する選手であったが、ユースに入り早熟なフィジカルに周囲が追いつき始めると、伸び悩みを経験した。2年時は、ボランチをやってみたり、CFをやってみたりして、プレーの幅を広げた成果、3年に上がる春くらいには選手としてグッと伸び、後方から攻守にわたり起点となる頼りがいのあるCDFへと成長した。惜しむらくは、春から県総体までの期間が短く、「新（真）ウスバ」の披露の回数が少なかったこと。選手権まで期間があれば、完成したウスバを多くの方にお見せできたのに、との思いはある。今後は焦らず弛まずひたむきに学業にまい進し、進路実現に向け頑張ってもらいたい。

渡邊美味

これは前監督へのリスペクトに基づく「情実人事」ではない！ 山東は、ノゾミ（18年度卒業、以下「年度卒業」省略）、アカネ（19）、ハナコ・ユキコ（20）、イズミ・アキコ（21）、モエ（22）、マオ（23）、アサミ（24）と、熱心で仕事のできるマネージャーばかりに恵まれてきたが、彼女らとミサキとはちょっと違う。ミサキは、日程等が頭にすべて入っており、顧問の抜けたところをすぐ訂正してくれるマネージャー兼秘書のような、言わねばスーパーマネージャーであった。そもそもサッカー愛があり、モンテの大ファンで、山東の練習のオフの日はガッカリして元気のない日を過ごすという。その情熱たるや天晴れ！ ある集会にサッカー部員全員が参加した折、要項に身分証が必要との記載を見つけ、忘れてくる部員のために会場に選手証をもって行った、という話を聞いた時には、その用意周到さに本当に驚いたものだった。

丹野善貴

選手としても、主将としても、貢献度が非常に高い。日々の練習の最後にミーティングを行い、その際主将は必ず発言するが、そこで話される内容が（顧問も気づかない）非常に的を射たものであり、顧問を驚かせることたびたびであった。過去の主将と比較しても、サッカーを観る目（眼力）が冴抜けている。すぐさま指導者になれると太鼓判を押す。プレー面では、当初、攻守にわたりユース世代のスピードとパワーをかわす軽いプレーしかできず、伸び悩んだ。2年の後半から地道にスクリーン（ボールと相手の間に自分の体を入れボールを保持するプレー）のトレーニングを積み、それがモノになった3年からは、ボールを奪われない自信がプレーに落ち着きをもたらし、本来あった確かな技術をピッチでしっかり表現できる選手へと成長した。今後は、ぜひ、何らかの形でサッカーに携わる歩みをしてもらいたい。